椿説弓張月

拾遺巻二

へ13
3908
20

3908
20

鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月 拾遺卷之二

東都 曲亭主人編次

第四十九回

三畧を疋て松壽鶴を救ふ

鷲巢山ふ李趙首次喪ふ

こんぜーよ典膳所。和義令の官人ホハ。鶴が井の中より声を發るを怪て。ひそ盜賊ありと。隼雄の壯佼両三人戟をりて刺んとするを。老兵ホ慌〳〵。推とゞめていふやうこの穴門揚ぎして刺とゞし。供御ふまかゝする水を藏さゞ。却て奇濟の越度とうなづ。生拘るとも殺そともさゞ。猶えめぐそこそとくく。衆皆これふ後ひく。壯佼ホハ。器械を含て井を成ア。老兵を内ふまりて利勇ふ縁由を訴ク。このとき利勇ハ既ふ臥房ふ入りなりれバこの旅なて。岩破と起。それハ凡庸の盜賊ふ

あんじ。朦雲が間者ならんやく松壽が告ければ四門を固めよ。
それぐうと出る。緯の為体を見るべたぞと答も果ざ。扨方なれ劍を
帶て。里之子ふ指燭ふ乘じ。ゆらりと典膳所ふ赴れて。ぬらくと老兵
ふよ緯の容なりをば。且く頸ふ傾けつらうやう。朦雲こそ幻術ふ長
ずる。彼が間者ならば風のごとく走り。煙のごとく滅失ざうも量がたし。
扨井の水ふ穢をそゝも。大事の敵をとり逃をゆハさるれ。只刺殺せと
下知されば。こじめ刺んといふ一壯佼ほうけるると答もあくぞ。扨こそ
戟をとりなほして。突くざさんとする折ふ。松壽忙しく走りまろび。戟を
めて刺んとされば。壯佼ふ此退つ。利勇ふ對ひ。今暫の猶事ハしらず。
老兵しても。こじふよりそ。その既ふ緊略をされりかゞりれ癖者をなと
て生拘じふんぬ。そ引出こじゆんとのひうけそんとされを。利勇

ほびとゞめて。ふゞそうち掉。軍師基兼怠り。朦雲ハ幻術あり彼が間者
なりはゞ雲の術なりんや。これを生拘るゆハ難く。殺るゆハいと易し。
さいふ間。こうう白つゆ。顆りそいふも傷痛く。松壽ハ佶と容ゞめ。
古人も嵐ふ投る器を忌とらんや。彼ものを。引揚ごして殺せ。
器を投く嵐を打ふひとしく。井を失くな找ふ損あり。この城元来水な
乏し。難を裂ふ牛刀ふ用ひるふハいとゞ愚。縦朦雲が後兵なりとも。
そも。こゝる。その術を好るゆハあらじ。凡隠形の術ハ四ハあり。水遁といひ。
火遁といひ。木遁といひ。土遁といふ是なり。水遁ハ水ふ隠れ。土遁ハ土ふ隠れ。
火遁ハ火ふ入て形を隠し。木遁ハ木ふ隠れ。土遁ハ土ふ隠れ。
這奴井ふ落て死も。そまゝ来て縛をすつりのハ。遁るゝ術なた故
なり思ゑを費しうふ。と嘲ると。利勇ハ

么めとなく〳〵ひおろ〳〵さぐり揚よと下知するぞ。最皆釣瓶の索をも繰おろし〳〵井の底をさし覗た。目今引あげんさするこゝ。索のたゆ
撓くそよと。ばひうけそ。まおく索放しおろす主地よ引揚よく。矢庭み
これ縛めけりさて燭を乗こ。件の癖者をそうみ。ぞふみ似ぞ羊紀
十四五ぐらなる美少年るりしうべこそ。果こ呆れ吐きこそくく
言語を出をりのるし。當下利勇が捨置あるこ人這奴瞰雲ふ劣ごる。
幼術あれいこそ。かゝれ美少年こ化て。人を眩惑し隙を窺めて脱去
みやあらん。大抵幻術こそ。形を変こるに織きの紙沃でかくれば。
その術忽地破くこらくこそ。りのぶも。這奴をう出しそ糞汁をうち被なむ。
下知されば暁きくらふまう。某全く野么ぢ。大里山る獲者のて
児子ぉ。二郎金と唯うりのるり。驚の羽を賣ろんとそ毎日こ城下み
往まーんがきのふより放されて城中へ出入るる行みこの典膳所とやうん
あへ。山海の珍味豚あり。世ふめるんぞ。これ美酒佳殽な。一又
なくもたらべさるんあとあれ么さんはきてひーぐるみ彼此をえ巡り
い間ぉ。日ハそや暮て城門を鎖ま。出べたやうもるくんぺ。半鄙の蔭ぉ
あるさぞやとそうみ。昼ま不ーのくとはしくれん。こゝろ鈍くも潜入るん
として忽地ま井ふ落されし。命を助てよべと。賓志みうみ欺れり。
利勇これを聞て。左右をえくり。這奴を認わりのありや。と問ば一人
の老兵さゝみよりて熟とうち観り。寔ここのりのはきのふ鷲の羽と賣ん
そうこありしのし。とうみ利勇。且く暴思しつ。いるく這奴が為体。おの
のひざ懸さ。獲者るんどの子あめぶびぬ。あれえよ。膚ぬの身甲と被とり。
今その声ざ懸きくに。毛圏掛ま似ぶ。のこるぶ。角乳も又物佛とり。

春谷子張月令繪巻之二

こゝに疑ふべうもあらね國典が孩兒話ぬり。父がめくうり誅まじいうみせし罪科
とこゝろぐれふ牙をおく処すれさに私の怨をりて。それを狙撃んとそれこそ
奇怪なれ。ヲーノ〳〵歩て首を刎よ。といゝてきと高く不知それバ。誇ハゐゐみく
兄透されて。脱まがしとそゝもも。怒眼ろ眼よ涙を含て。背へまわせー箸
を握り利勇ふ走りかゝらんとそ。そのうしろより紫よ。撲地と轅じが膝
をとらへて。葉息ー。ゐられまバ名告ふ及がと國の為に患を盡せー。つぶ
父ふ何の罪うある。こる兄汝が誅言の舌の根切て亡父の寃をそゝふ
雪んとてやるふ寝戟を枕と。忻ようれかひもうく。命運終よ全うふ
てかく薄られまバ。今ハ一日も存命うを欲ぞ。恨くハ利勇阿公ホ
が首を打て。茅を考妣ユ供るもまた盡ぞ。殺ぞ殺せ。九ッの世を行るもまた
をりく飽までみ。そひゐふさぞ中ハ已ん。と声高ゆられ罵まバ利勇呵〳〵
さこゝろ笑ひ汝釜中の魚となりてうのほ刻の分際をゝぶ壁ハ蚊蚋の
山を負ひ精衛とふるの。海を填んとそれまたく等しくけそゝふ及がねゆ
ふ。身後を憑山ハまゝく愚ゐり。こゝ毛國典を誅せハ仰ようそその罪
を正せり。阿公がゐることにあらびとゝいゝバとそいゝゐゐ
ものゐゝや人を敷くとも。いゝそ
のにつゝらぎつゝとてもゐほ刻
ゐんぞ大なる驚れ剣を抜〳〵走
一時の怒ふ乗〳〵その少年を殺〳〵敵ふ英氣をゝゐるあり。なゝとく
暁沼のゝぐれ。某頃日聞者ハ首里へ遣〳〵窺せ〳〵に毛國典ぐ子ども
鶴亀い寧王女ゐる册きそ。小琉球守る嶌北ふ脱れ去。主従赤瀬の碑石の
ほとりに。ゆく潜ぢ〳〵居とりく〳〵

を幸ひ。彼嶋に追渡ら[し]て。主従をなんとせし折うも。天孫氏の威ま
よひて。禍獣が土中より滅し。王女が不思議み祐ひ汐を。何地よりも
去のふ[ら]ふ賊兵ホを辛じて。鶴亀同胞ひ擒みしくも。これをおひて首里へ
かへりにそれが。擾雲件の胞兄弟を憐こ空よ謀畧を示して。大臣を始せん
そとおもへれども。大臣の運高くして。今夜鶴を生拘のくり。某つよく。曠雲
が奸計を察とられふ。鶴り。大臣を
賺せるそうん。ちゃ大里長川をより山蔭し。軍兵數伏ちきて。短兵
急よ。この城を乗そうんとすれ。大臣私の怨をりて孝子
なくは大臣怒これを殺しるひうんするとそれ。大臣私の怨をりて孝子
を殺しるりとのん。毛國君の世家はして。よく民の心を得るり。今曠雲
討をして。名家の児孫を誅しるぶこれ民の望を絶なり。民の望ひ絶
とそれ。軍威震を軍威震ざるとそれ。この城おくたりちがにし。只いく度も
ちひうんして。世の侮を禦ふく。と蒂を拍てそ練ふれ。その辨舌爽はして水の
流るごとく。こゑ理ふ稱ひしぶ。利勇ハ呆れて枝そるせ。剣をおそう鞘ゐ
おとるゐ。あうれとそれいうまでん。軍師計策ありや。と問ハ松壽莞然とうち笑
て。敵の謀よ就て謀を行ふるハ易[し]。大臣こゑ[を]用ひしも
いふま。利勇忽地ゐ氣色を変。軍師ハうれかゑれを[ふ]こゑることの多岡ゐ用
ると用されとハ。緯の便宜を擇ひ
かうりて。そゑゐ侍る徒ハこゑ腹心のものなれど。謀そ密ふるをよ[し]とうを且く
遠離るへしとのくハ。利勇負改くて。晴をりてその意をもらされハ典昭
所の官人ホハ。里之子とうろともに。
膝をすゝめて声を低くし。大臣曠雲を滅さんとするふ。徳を

る。鶚が免して中城の按司を任ず。絶る家を嗣しめんをもて一旦禍獣に害怕ず。曚雲も降参せしめんも。悔を悔。徳を慕りみて。もつかへまつるべし。直を挙く衆の曲るを措とれば民従ふ。ことは。これ是。戦をして勝の謀ありや。用ひもちゐざれば。行ふも難うべし。用ひもちゐざれば。行ふも難うべし。これを逆臣毛国頭が手まりの一これをしも。重用して。按司とせば。賞罰こと。かにし別ありや。謀ありやと。同の松寿。蒼筠。某既も三の畧を定む。今つゐに形上策なり。亦中策あり。下策あり。已に勝まさんとする。利勇かまひて。何をう中とし。伝をう下とせん。それすくなしとて耳さしまそれば。松寿も頷をはきあわし。今夜曚雲丘を出して。落が城に火を放る。其時待そるべうん。さらば天の明ぬる間に。先登之旗

にて。落を大里のあるさなる。鶚巣山も引到らし。流く首尾別るる体なせとしるべ。曚雲が軍兵ホ。その謀の漏らる。其こそ。遽て首里へ還るべし。そのとき某四五百の逞兵を招て。長川をさし塞ぐ。これを経まば麾もせん。かくて落を。城中へ引こむとして。松寿と又下策とん。落を賞せざ罰せざ。放ちそ。ゆくびしろべ。曚雲甚高を量りみて。かうべしく南風原も。寒を撃こうべ。夜もいく深るも。あけなば。それもうひるしとくいそがば。利勇はくぐとうちゆて。下策へ行ひ易しとらんぐども。落を放うべきことそ。謀の足ずるを。仰ぐうそれその中を執ざしとそ。心腹の抗登之趙翁。李虎を呼じて。機密を低語の件のあんこころを汲くめ。ぐて落ぬらん立五六十人の兵卒を従へて。直も鶚巣山へ急くみぞ。松寿も駸の軍兵をおく

城を五字平の北より長川大里を投げ走らうとされる行ふ毬の兄よ諫られて。こゝ城ふぢも残アそぎまり。城溝の日とりふさの行ふ星の光乃添ゆくのこ曉ぐこちくなりぬまど。絶く音ぎれうりしべかくてうるべなめくぐそ。潜び入くんとそ折から。忽地城門をおーゐらして。兵卒五六十人毎まる器械を把こ。蕉火をふりてらし語をいふく縛めて。真中に亀をこめ形勢ゐ吐嗟とむうう驚き。多勢う中に殺く入り。兄鎗かけうぶ。呶くびめぐせば。目ふある大敵ゐかけ逸ひく。果敢ともきるも紀せど。同胞一脊討死せんい。大きうれ不孝なりとうてもぐ も絨る。兄う言語の耳底ゐこぼりれぐうろうぶ。さぐりがされ胸を挽て仂うふ打も蒐らとこせんかくせんと曙ば。亦軍兵四五百人うぶれて城を出かくてへいう及びがにとろひくて忙く。懐う績松をうり生一歇の振こぼせー火をうりて前る士卒よらちほこ兄が先途を見果んとそ。後方ふ跟くのうともに走れども。鳥夜ゐれな人怪さそ趙豹李虎そ松妻ふ先ぶちて。只顧ふ路をいそげへ川良の橋をそやるて辨嶽のち那ろるれ。鷲巣山ゐ某ゐけ乱ふ時の夜のことなれがいと長くてを天へいまぐ明ざりそ。この地方。北を鞍嶽ゐぐれて。茂林ふく。南を岨高くて。屏風を建るごと。されば利勇ゐ松壽が謀を用ずとらくごの敢を拉ぐにこころなく。只話をのこいぐせくろひく。後の患なくふゐそまろしと趙豹李虎ふ耳語しかば。件のお人領諾して。鷲巣山ゐ到るとやそ敷皮のうへふ誘ひ引をそ松壽へ汝が助人とそまぐにうせ」か。その謀迂遠し。汝玉既ゐ曙雲が刺客とるりつが城中ふ潜び入れが大臣決し放うるぞ。

なりて首を刎るより。命をしくは。寧王女の往方を告よ。某亀が所在をいへ。いざやいへと左右より。いと詈りくまなく責問ども。詫を閉られ眼を睜き。趙豹と李虎をにらみて。親の仇人を討ざらんと。忍ひとちしその日より。事ゆゑそかくまはんと。豫て覚悟の雪辱。命も。惜まて今きく何をうらみん。

泄ぬ斬らばやく斬よ。利勇ハうたるゝ泄ぬが運竭く生拘られ。敵ぬ首をうたれんとせし。いざ斬めと。冷笑へば。両人共もあくまで大れし怒の手お仰げる胸の太さよ。この世の暇こそせん。と罵もあへず。趙豹袖を巻あげて。泄が後方ぬ立廻り。氷なる刃ぬ抜き。白く清き。泄が項の毛を。数回撮あげ。刀尖高く揚上ぬ暗れ樹蔭ぬ身を倚て。隙の容ぬ窺視れ。亀ハ忍ぶも泄ぬも忍ぶど。勢ひ猛く走り出。今まさに刀を閃し。趙豹を砕と砍よ。首を誘を飛越て。逼向へ落きりけり。

李虎それをうそ驚た隙刀ぬ引抜き亀と砂くんともる所を。踏まゞ身を起しく足と延し李虎が膳丁と覚る。遮られて阿呀と叫びもあへくを仰さまぬ倒まりぬ。その隙ぬ亀そ刀をとりなほし縛を切解ハ兵卒ぬ立さきうち撃てかゝれ。亀ハ多勢ぬ取こめられて起んともえ。李虎が刀を奪ひとりて。起〳〵もたてを斧うり乱の下まぐるまと刺。〳〵ぬく刃も潰る。鮮血ぬにりて忽地ぬ。岨踏外して谷底へ。ころ〳〵と輾墮生死もあらぬなり。

亀ハ救ぬ遑あらばと。右を打左ぬ靡けし。二人ぬ残を負し。二人を矢庭ぬ切うめせと大勢ぬれハ抱ともせぬ。雷叫びく攻ぬれハ既ぬ危くえゝる折ぬら。忽地喊声ぬ起小雷し直曽の武者四五百騎樹ぐちの際ようかけ知ぬ。その勢ひ潮の

うのそまの鷲巣山ゟ
る悪七兵衛
ちく放ル

涌がごとく。當るべうもあらざれば。南風原の兵卒ども。戦ひて辟易し。株ふ
み折き。おのが刃に觸れ命を隕すもの。其餘人その餘疲癈を負ふもの
右散右散と逃去れば。敵の大将真先ふ馬を出し。蓬一かくせと呼みう。
その大将へ別人よりあくどく曚雲い謀よりて。大里山のほとりふ死鶴色電が
暗号せ。南風原の城を乗とらん。准倚しる耳目官全廣ふりこの日
曚雲へ高樓ふ登りて誘亀が。敵ふ若られるをもりてければ足捷兵ふ
大里山へ遣してゆくひ全廣ふ謀をけ人とこの曉ふ驚巣山ふ赴きて
利勇が士卒を撃ちし。誘亀をも刺殺せよ。よしや漏そうもありとも。
長追ひそべうな。敵ふ新手の加る共ふ速ふうくして辨嶽の麓ふ出
甚処ふ山児ふ家を乱妨しそふかくべと下知せしふ全廣ふその期を
違ず。大里山ふ馳来りて軍兵を二まわりうち。半ふ迫る敵を追ひし
半ふ亀を射させしが。亀ふ毒蛇の懸るを脱まくゆるび虎狼よあることち。
刀をうんで脚を切ふひ且くこれを防ぐとふくも脱且果てもあくされば今
ふ命をうたりのふして死をもふもとりあ
ざうをちうもそ身を打しく谷底へ真逆おとしふ轟び落るふ君真物の擁
ご護ふやうけんまざうも身を傷うばん。さそふうんとそふ
憑しく。ぼ公ふくと呼びかくれど松ふ
ばそや脱且去るる狂猛き獣も残ふ
ありのふふうもせめて尻をこんせそふべ長れ
谷蔭なれば日本暗く。其処う此所うと呻吟て生るともなく立あがいふ
おのぐらふる石湯を掬べどよかくふ。濡う
おのと明ゆくかたの山鳥。これよ吾常を告るうと

果〻なく惑ひ入ぬるぞ。

第五十回

樹を離れて孤獨命を保つ
驚を獲て漂客欝を開く

松壽が越豹李虎ふたりつれ。駿の兵をわけて。長川の上ゟ赴きぬる事候を遣して大里山なる敵の色を窺そのやうの態そ走り帰りて。彼山の頸ゟ敵一騎もこゝへとらん。松壽これをはさそや。ゟ曚雲が奸智をうて。彼処へ軍兵を伏おくべし。さすれかくまれ大臣こゝの謀の左ようにそのを用ひそ。越豹李虎をして。話を驚巣山ゟ引せしめ。敵を刻そ為おのれこゝで彼を殺さんみるべし。これ今急ふ故ごろ小鳥統お生ごかゝらんおっかりくとひとりふたり。人ゟ長川を戻〻し。その外ハ軍兵二百のまりをわそ駿馬ゟ鞭をあてゝ。

驚巣山を投て馳さる程ふそやゝ山の麓ゟこゝ洁処ゟ全黄ゟ追打せられて逃下る越豹李虎が後卒ホ仂〻松壽ホ磯とゆりおひ。ほのくゝと明そむる山風ホ翻翻と閃く穏ハ正ゟ是身方の軍兵也とこんてけまぞ。狩場の雉子の草隠是せこゝにして。軍師吾僧を政のへ。政うくと呼びめくごと隊伍のうちくゝ走り入れ折うふ。耳目宣全黄ハ士卒お先ゟこゝ馬ホ拍ま間ちかく追迫りけ〻と見れバ。松壽が一軍のくゝ馬路を横ぎりて前ゟあり。されバこそ。曚雲法王の前見。事違ざりけれゟ引かへせこのひも果そ。馬の平首引回らして。辨山嶽のごとく馳去ぬれば。松壽も。敵の謀あくんことをゟそこれを追そ。且く人馬を休まん。逃ま事ゟ引りのごも。驚巣山ゟ。越豹李虎が駿ゟ追を。且く人馬を休まん。逃ま事ゟ引

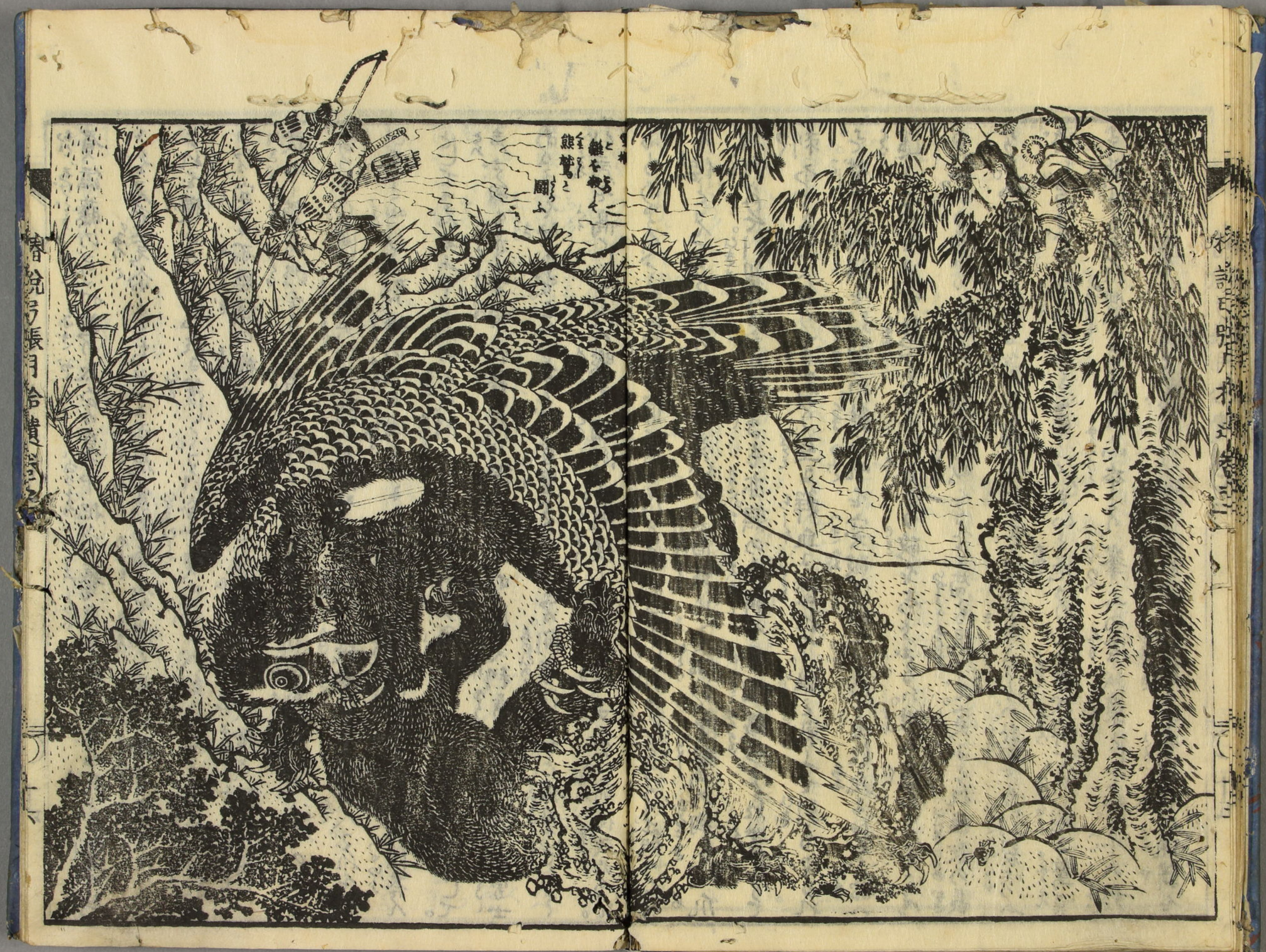
救ふの遅くして舶亀は兄弟をうしなふ。ふかく後悔しやがて長川を立ち久くりて。諸軍を引率し。南風丸の城に入りて利勇に緯の趾を告しらべ。利勇が懲こきみつされ翅翁李虎を捕へてやをかくだらくとも舶も又深谷へ落ちくらんもの木石を打傷られて微塵ふみりくる。亀へ蹊雲が軍兵つゐ財縮やくれていうで脱給ん。彼朱牙既よ死れば只これのみ後ゐをかりと恣山ゐ訴じ。赤松蚤に関くのごとくされか蹊雲曇よ舶亀を射にしるゐいうまるこころなりん。此てこれを刺せんとし給ぐら。却亀を射つやく量知がたしとのべ。松蚤微笑く。舶亀い忠孝至二の少年かれども。彼ホのうざ蹊雲が毒悪のれを曉らざ。よりてその謀を稟て咤夜大臣を害せんとそれふ。支るふだ。蹊雲をへこれを猜して亀を乱軍の中に射たしとうんおのが奸計をおくせしとの為るうん。さおさ

ぞやとのべ利勇が舌を巻て。ゆくその豪雄よ怕れ為朝二日を約して辨嶽へ赴れよとれふ。今ホ日の間諜者のうべしよやゆり乗るも。既ふ二日に後れよう城中へ入るに及ぞその旨ところりくとのべ。松蚤が眉根をよせいふ為朝その日の本の皇孫盖世の勇将なり。決して蹊雲よ後ふべくふし。大臣疑ぎして重く用ゐのぐ。王子を舊都へ遣しもうんこと日を俟てまつぎしとのふせも果ぞ。利勇忽地ホ事出「を変じ。軍師いうるれバうまを仇とし寵ふ舶亀を助んとして越翁李虎を失い。今ホ出處不定なり。為朝ホ荷膽しそ。頻ホその武勇を稱るぞやこれハ乞托孤の大臣國の治乱営にあり。王子ぐみ活さんとも又死さんとも。ム のほかよる隨ふ。にそ公言はバ罪免がたし。その首惜かふぞハ凍めりへとのたまくわぞ。松蚤ハ

黙然としてぬぐひいろを袖うちかめして退出る。猟師は
驚巣山ふて。こうふびも。寸亀が援を乞く。翁が刃を脱れ李虎を突
砍伏ふれど鮮血ふ嵎を踏上ふて。数百仞る谷底へ滾々と落
うふ誰うちくん山の脚ふのと大れる栗の樹ありて枝葉参差として生
繁りさみがら棚を架た檀を敷婦ふ異るふびとの樹の又へ爲とぐ
まりにそれが幸はして身を傷らざれども。膳をうとして息絶ふれが志ど人
事をおふざりてさるかくて亀ハ樹のうへふ兄がをるとハそひうけぞ。志
志が爲ぬ答みそれば。なや彼此をたづねりて兄弟終ふ沼もわかぜ。
かくし行よその夜もめけて。梢を佛ふ山下風ふまふおく雫の降かくて
つ鶴が咽喉を潤しけれが忽地ふ魁生して頭を擡とこえかうこれバ足曳の。
斧もおくぬ山猿ふくて。怪しや我ハ梢ふありその樹のうるさ。と四丈も
あらうんとおぼしれふ下ふたたえて枝もみそれが足を絡うけんやうもめくぞ。
くからはしてをりさんと。ふくどうそれどもなれ壽の命のもて而侍るかひ
なくてうぶ身ぶぞ。ふいかうさ身ぐすて翅うえ。いうみりけんをむりに。胸ふしさいや
て。もぶつるみくも直下せぶ。樵夫のかうふ路ありけり。些ハれりとそちらへ
まる人めくふびとふて。救ふを求ぐ。と思念ーせ只らとづくふまりをる時ハ
十月の下旬ふれど。風暖はして木の葉猶ふ葉子殻熟て。未落も垂さがれど。
これをさりて飢を凌ぐに。氣力いと健よろりね。浩処ふ前面ふる巌の蔭ふり。
いとえれうる荒熊の。子を連るぎ生ふり。石滴みそふて求食つ。樹の下
ちらくふ来ふり。何ぞるふとえそふ行ふ。谷川のほとりふる。畠を楚と抱き
あげて。下ふる澤蟹を。雛態ふ拾ふる。ふハこれをえそふ寝ふ

のりとし活る物子を慈むがごとそめりそれ今親の
仇人を撃難てかくとよしうえ父母の恩さそ形ある世をりくの
を身ふもこそ涙ゆふ禁めあえを目を拭んとそれば忽ちも。掻り
栗の子て覚りてそろくと熊の上あそ障かれ牝熊それよ驚きけん。
抱一声を撲地と落せば。憐べし下
を吐くく死まけり。北熊のこの景迹よ。
せど子ゆえやいく打拘ごとくにりし悲鳴くこと限なし毛類
の海ますくそ。つが殺せとそひもうけぞ。又樹の上ふ人ありをきくぞ。
をえ久こ右なえ久こそもつが子をば何物うかく殺せとそふ。
いとおどろくしく四方を睨で啼る折うち羽あり。し銀と音さして。彼岩頭よ
放るりのこれ鷲ありその容ふ熊よ一倍しそ。備うり尾頭よ至くそ。十尺

あもあるべく左の翼を備前よ徹まくぬくびく翔ありうり熊へこれ
を倍とえてつが子の仇とやそひく。奮然として跳かくそ。鷲の胸先へ爪
ふ打ちそくく裂んとするに撃るも亦熊の向脚を掻細織のごとく當をそて
刺やどもふ上よりり下ありり互よ鮮血よ塗れつ。挑よ戦ふて引もつれ
ざ驚ふ猪羽をく裂れ。熊ふ吭を突破られて。ありともに死よけて。勝へ
遁よこれをえそて熊がその子の死りる改をさざるとこ為
これぺいうふもをべ只その敵をえ猛獣の長
なりふあれども。彼鷲前に獲まごでして。
ざしさぶつぶ労もかくてあくんやいと危うしと舌代掉て。只顧ふ驚嘆
を折くもれ震こあくれ山本よう。峯上の雲水葉としてや。羊の群
を。二十八九ありくんともぼりた壮士鹿れ技の行勝えて鷲の羽れ猟前を



貟滋藤の弓を握り太刀の真中把て驚き走る死る鷲と熊とを引そ莒伏ともに咲こと雨虎食を争ひて傷くこれ猟者労せずして是を獲ん。とのつぶやき今一隻の鷲が射こらへも二疋の熊なる実も不思議の獲なりとひとりこゝろに喜ぶ抜出し熊の肉をうち落せば怪しくも熊忽ちかき消すごとくに滅失けれど訝しとこれを見て声を發して呼ばはれば仰ぎて叫び件の壮士現れ出ていふやう。おのれ形容を変ふ身の丈八九尺筋骨逞くして。声さへ亦尋常に異なれば猟者にあらじ又利勇が士卒よからぬ雲霧にまぎれ来るまじ。何者にこそと推量てゐるうち。また声を高くしてこれ瞭雲國師と名乗る。前夜敵ぬ。

利勇が兵士ふ濶よせられ。首刎らんとせしに不思議よ脱まて。この樹の元永滾落進退究りてせんすべをしらざりけり。列卒縄めらば投あげ。扶おこさんとすれば。実事虚言うち雑ぜるやうに憑こと俄に満月のごとく弯固ゆ張て射こと。百発百中て。驚たれよ何ホの恨ありて。射こと。あと嶺さんとそこゝろ得ぬ撓の上ゆ大なる猿さんとせしが。望ある者も脱まがれ。命ありせば惜むふりにも。縁由をもつて叫びつ。勸解つ。繞る樹の枝ゆ攀くれて顔を定うせんこそねじも。艱由基が箭をとりかけて腸を絞るごとふ叫びつ。猕猴もかくやとぞ思ゆ。いと不便ともいへばえ。ふいと木ふあらで壮士ふ。ゐはよくも声を励し。縁故を告されば情をとく怨こともせず。これ原来大日本天皇の苗流ぞく。鎮西八郎源為朝と

為の事故めりて故國を離れ。佳奇呂麻ゐ漂著して。大臣利勇が稽ゐ
ゐ奉ら南風源ゐ赴くといへども。利勇猜疑して。三箇條の難氣を課せり。
こゝゟを以て果ず。かゝるに重ね用ひんとらへて。身一條の小錄の港にを
塞ぐゟ。等二條の辮嶽ゟ。兵士を整とるゟ。よべて三日を限りとを。かくてこれ立地ゟ港にを塞ぎて。
辮嶽ゐゝけ登りて。既ゐ三日ゐるを。せども驚るを見を。又敵ゐ遭を四日ゟ及ぶ
今朝ゟ至りて。就ゟを射てゆくの。この処ゐ追蒐ゟく。曚雲ゟのの
ものゝ心と名告をいふで放をべし。汝ゟ怨みとらくとも。囹圄ゟ従ふてこれ。天
罰ゐ沿脱をでこれゐ命運の竭る不と観念して。潔く首を招
ゟせよ南無阿弥陀佛と唱もあんぞよ引漂と切ゟ發つ。寇を外して
ゐんその箭落ゟ身ゐ
ゟ。ゐくて世孫ゟん高木の幹の中央を綺

ゟく壁折ゟこゝゟく滅離くゝと。俄忽地地ゐ下て落を小枝ゐ摧ゐ
ちに聊も牙を傷ふべきを。ゟら地上ゐをりてそゟも曩ゟ劍ゐ失しつ身ゐ
す織を帯されゐ就ゟる立ちれ箭を抜ゟりて為朝を刺んとする刹ゐうめて
ゐうちもゟ
丁と打落し。ゐのくしやと猿臂を伸して落ゟ項髪ゟん砥捻倒して膝ゐ
組布首を捽んとしてゞめてその面を見るゐ。と鵜圖ゟる少年ゟう。
つゞ牙をゟるゟそゟるゟも。かゞうけ笑少年を整んゟ勇士の羞る
ところ。助けをともがしべゝ一翅さんと。ゟるふ折ゟふ。ホ一人の笑少年。
端くゝ走りすゟ。小太刀と電光のごゝうち振りて為朝を砍くゝとす
ゐ。えゝとゐゞら牙を反ゝ。又その刃をうち着ゝ。組んとするを引はて
肱腋ゐかいそこ動ゝゐゞ。これ彼をつゝくえて。まづ下ゐるを引起し。
汝ホが面新のよく消ゟん胞ぼ見ゐるゞしいゟなれゐのゝふゐれぞや

こゝにて巨樹を折てまろとなるを馬朝鵬亀を戦ふ

時宜ふようく付命を助んとくく名告れと宣へば浦亀が歯を切まかくてそ
こを運搗てにげこふ死をするをも。憐ふ人もあるものぞ。こゝに危難を脱れ
よ。爭ハ兄を尋めぐり。兄ハ安房へ赴き父母の仇人ふもくるふくりう音をいふまゝと・へ同が毛岡井が孤
となれ。こゝ是過世の悪報と忍ひ給へ。この國のくるべき名
の生るをもかしこるくらん。就る巣よりも猛き心よりも恨もなし。
うち拂ひ。ふゝへの人の言ふ名をきくふ面をうるふ不如といくおもこの
それを為朝を小膝を拍て驚嘆ー。尤まに抱き縮めるる。亀を放て塵
るゝそれ決して汝ホを害せでそ為朝故國ふ住ひてもかくとこるふ漂
著せし縁故ハ一朝ふ説盡をくうもあふねどもし放せし恩を索れ安
ふこの國へ推渡て。舊虬山の麓ふて。王妃寧夫人の恵を稟。太蛇の珠
ふ付よりしその舊恩を復さんとて小琉球ふ王女を救ひて住奇呂麻ふ荒
ぬ磯ふ潜しそれハ南風原ふ赴ひて。すゞ曚雲を討滅しおひて後ふ利勇ホが
罪を正さんとやふのこ真實彼ハ助れふあふぞ。汝ホ親子兄弟の忠孝を
寧王女の物ぐるいに成しを救ひ出さんと思ひるくら。つゞ身容ふれざれハ後
をあふれもふ遑なく。いと痛くくも胸苦しく為朝ハ滅をでかぞ組ふきふるこれ
勢果さゞ後ふ志ともかしあふとこるふ

被りその滅心を恥るのこゝろぐ。寧王女ハをや玉宮よりおしまゐらせて外ざま見くふせりよや言を巧はして他人を欺くとも。吾俑をひゝて欺き汚んこゝろぐ。勝負を決し。汝が為よ報ゆるこゝろぐ。佳奇呂麻へ赴くべきと同胞一舟冷笑へ。為朝さもく嗟嘆して汝兄弟怜利とらくとも。年少それが玉石を辨せず。汝ホを賺せしハ曚雲が奸智はて王女ぬ幻術ぞりつれ汝ホを欺きて何の益ぞある。汝おのづからけみえせざるハ亦是者奴が膝の下よ組布ぞらら。その名を仔メて助ゝるそ。緯の虚実ハちゞみたなりつれ半世の勇をりて。いまゞ利勇が罪を問ざ。況て汝遣が小腕をり。て輒くその力を遂ゞに。且く佳奇呂麻ホ匿ひ。て忠を王女ぬ竭せしこれ時を経ず共ぬ汁アて親の仇人を報ずゝんこゝろよく源念して迷ひをそれよと諭しつゝ。亀ハ頻ぬ驚嘆。それもそのはずこの曚雲ハ首里の大将耳日官全廣がそれを救ひで矢石を飛し射て殺んとしくりしを。曚雲が詭の謀をもてぬ足れり。ぬ班ゝゝのりしとその牙ゝ谷ニ滾落ゝ。ちが往方を索ゝ。舊の処へ去かくれぶ兄が組布れるとそ。これを助んとせし頭末をもちもなく告ぬけれバ話も暁りてふく悠慨。感涙ゆゝ袖を濡じて為朝ニまうさく。曚雲にそうゝれかるぐしく南風原の城ニ潜び入こゝろ独を醸し。ホ眼晴して英雄を認ぶかゝのふ弓勢りて葉を射ざれバ十囲ぬあまれる大木も一ニ前ニ折ふ。十囲ぬあまれる大木も一ニ前ニ折しかバこゝろおりてのるべきニ疑ひなしこゝも罪ふりれ。君ハ是日の本れ皇孫。ろぐ寧王女の愚人ぬり。三ぬ固條の紡を定めて。を死空ゝくなりぬるぐ。利勇ハよく用ふべくそこても捨ゝれ者ハしあれバ。話が首と刎ゝ利勇にむく。裘跡ゝれ。

亀が仇人を撃よすがとするべし。そ
の退。縦こゝに捨べた命なれ兄ハ存命時をまちて。阿公を撃利勇と
撃こゝの世めの世ゝ主親へ忠孝を盡してなどといひつゝ合掌「恩
義よ勇めば死をども辞せじ。その弄ひや君子なれ。この兄はしてさの実。
いと有ざれ少年うれる。と為朝頓て曠賞」これ今曚雲が士卒ゟ称する
ごして。課役一箇條を缺ふ似られど。そこにもさの熊をほろう。夫熟ら
男子の祥。春ハ生く樹よ登り。勇を好こそ気七ちの
りのこされば二頭の熊をのて兄と共が首よ代大臣利勇ゟ欺くべき謀ハ
かゆうくと密ゟ告ちに二熊の皮を打おとし。本その膽を粉出してこれ
を陪食よ与ふ寛ふやう。然膽ハそ易くふべ故よその償最貴」こと
腹せが心を清し。肝を平ぬ」目を明はして醫を去蛸蟷虫ゟ殺ゟ。汝意
その一ツを食ふく路費とし」一ツを寧王女よ進ふせよ彼処よ至くバつがく
も。ゟゞ亡妻のゟまでも。審に為よ
ゟ。と促しの人。胞兄生これを受捧く地上よ額つゝ誠よ君ハ仁義の人ゟ。
この再生の恩をおりくハ鶯巣山もも
ちゞ隠ゟ月の晦ゟ。まとう行く
中の哀欤。こゝに説も竭しがゞ。命あり時ゟくふべ再び逢うあをうみ
ゟ。ゟの住寿呂麻私よ便りとそて彼ゟ推渡り。王女ふ瘴の熱を生ずう
さんと荅果ゟ兄弟一斉ゟ起し。のとぶ露けれ谷蔭の。且開の風の吹
入ゟ。ゟゞ亡ゟちゟ。為朝を汚亀を樹がく折ゟまで目送りて驚
と魚とぶ二ツの頭を。藤蔓ゟりて繋ハ引うけて肩よのし。路ゟれ
踏をたどるく。粹山嶽の麓ふ出ゟくハ午の貝ふくぶゟゟりたり。折ゟれ

この山陰よ住居する。樵夫獦者ホが茅家二三十戸。悉うち破くり並。
一村の老弱男女或ハ砍仆され或ハ瘡を被り。道の次ホ泣くくをり為朝
それをごんさらじがくて。その故を問るに。こゝハ南風原ホどの
所領よいが。曩雲國阼の大将全廣と申ふんいふ猛者。南風原ホ攻ん
とくく。軍兵を出〳〵ら私ホ妨せふれしより。こゝ幾ほそばホ
やゝひろん。数ホも足くねろ里をかく。乱ほそばホ首級の
拘ぐれハ。為朝これを聞もめくさ。その軍兵仆処よる者奴ホ首級の
ひとほれお驚はして。ゐさをべくれと。憑しげホ宮人ぎ又のホう。
それいこの暁ぐこのろれが。今ハ遥ニ引退きねばしるれことのさまひそ。
何処の人うにぞ。南風ホ乱れるぐ為ホ大臣よ縁由を
訴てくべ。これのこと教ごまるくそる。とらの間ホ為朝ハ懐ろう茅剣一包を

ろり出〳〵。これハ日本の漂客ホ為朝とゝふりのぐり齎したる茅ごて
あり。こゝ金瘡よ極めてぬしもの〳〵ろち用いよし。南風ホ到るハ縛
の疵をうごべしと叮嚀よいひ慰めて。件の茅剤を遍ろ里人ホこれ
を受くろら戴ゐ。教ぶること大ごるぐべ。かくて為朝ハ全廣よ種見さる
疵洗ひ濯もおせどもさそめぐべたこゝあぐれバ。この里をうちて。川良のうこ
へいそぐて。葬嶽の山脚ろれ林原ごゝ人跡絶て樹立隙ろく路のと
暗きかるまふりる山神廟のり伊。ろホ至〳〵弓に拠る鷲の羽多地
ホ膊び落〳〵を拾ひあげて結ひそえまろ。ホ滾〳〵と轉落あり。
かゝやと掻き抱きそと。これバ。古廟の宝前ホ大ごろる散銭櫃あり。これ
こゝ。完竟の物なれと知りぐちそ。そのほとり人主うりろ人ハ廟をのぐく
荒〳〵。狐兎の踪を印し棟梁かごふりて。鴟梟棲を作るり。ろろる神ホ

まろうど人、揖ふ扁額あり。内は神體あふぎ礼ふ人も治まれる古廟よ散銭拾ひあつめも益なし。こゝの吠をこの櫃よ納りて供養をつとめ給へ。こゝまをかけて。打ち蓋ひかい物りうへいもかけど櫃の内に一人の美女臥生てくとり。此彼ひとしく面をあはして。こゝくいうあとそうりて互ひ本ふこの怪、こゝ立出る女子の袖を為朝おどしとらへめてつぐとゝのへば。膚いと素くして雪をも欺くべく。黒髪の長く匂ふ。末央の柳ことく凝れり。ふりさけ衣よ留奇南殘ありて。その容貌しかゞ西施がひそみ呉宮ふ入ふざるとて。野花偏よ目ひ艶く。小町が玉簾と吟ずるとゝ。暮雲月を吐よ似りこれ神狄。人礼。次の巻を續もてまつらん。